

【新刊紹介】

# 『持続可能な大学の留学生政策 ーアジア各地と連携した日本語教育に向けてー』

大阪産業大学国際学部准教授 春口 淳一

HARUGUCHI Junichi

(Associate Professor, Faculty of International Studies, Osaka Sangyo University)

日本政府の掲げた「留学生 30 万人計画」が 18 年末、当初の見込みを越えて、早々に達成されました。一方で、高等教育機関での在籍管理を巡っての不祥事を告げるニュースが駆け巡ったのがその翌春のことでした。ただし、こうした事例は枚挙に暇がなく、程度の差はあれ、これまでも紙面をにぎわせてきました。むしろ氷山の一角と捉えた方がよいかもしれません。

果たして留学生とはいったいどのような存在なのでしょうか。少子化が進む中で、入学者数を確保するための、いわば調整弁と見なす教育機関があることは、上記より察せられます。

本書は、日本の高等教育機関が留学生を迎え入れるにあたって、どのような点に留意すべきか問題点を指摘するとともに、その改善に向けた提言を行うことを目指して企画したものです。留学生の教育と支援に直接向き合う教職員にとっては当然のことであっても、教育機関全体で認識を共有できていなければ、先に触れた社会問題が相次ぐことになるでしょう。

本書は 2 部構成からなるケース・スタディをその中核とします。まず第 I 部「受け入れ側の実態ー留学生を持つ価値と国内高等教育機関の期待ー」では、日本国内にあって大規模・中規模・小規模の各大学が留学生とどのように向き合ってきたのか取り上げました。大規模大学が果たすべき使命、中規模大学が抱える課題、小規模大学の挑戦から留学生政策を多角的に考えます。また第 II 部では、「送り出し側のホンネー魅力的な日本留学とはー」と題し、アジア各地での日本語教育・日本留学についての概況とともに現地教育機関が日本留学に何を期待しているのか、或いは不満を抱えているのか、その生の声を紡ぎます。

以上を通して、留学生を持続的に受け入れるに相応しい教育機関の在り方を模索し、日本にやってきた留学生のキャンパスにおける立ち位置の向上を目指します。

「グローバル社会」という言葉がすっかり耳に馴染むようになった現在、冒頭で触れた量的拡大も相俟って、留学生は日本社会においてごく身近な隣人となりました。留学生政策と真摯に向き合うことは、教育機関だけの課題ではありません。キャンパスで共に学ぶ日本人学生はもちろん、広く地域社会にあっても、多文化共生を推進する一助となる「リテラシー」であると考えます。

(宮崎里司／春口淳一 (編)、明石書店、令和元年 11 月 20 日発行、2,800 円＋税)